

風客仁木充長（二）

——享保六年項追捕——

はじめに

本稿は、先に発表した拙稿「風客仁木充長——出生より享保十年まで」（浅田徹・小川剛生・兼築信行・神作研一・田渕句美子・堀川貴司編『和歌史の中世から近世へ』〈花鳥社、二〇二〇年一月二五日〉所収。以下「前稿」と呼称する。）の続稿である。『和歌史の中世から近世へ』は故松野陽一氏の追悼論文集であり、松野氏の三回忌に合わせて刊行された。近世の堂上派歌壇研究に大きな指針を示された松野氏の霊前に奉呈するべく、江戸を中心とする関東冷泉派最古参門人である仁木充長の伝を試みたのが前稿である。なるだけ一本の論文に収めようと記述の簡略化に努めたが、出自の考証に想定以上の紙幅を要し、彼の人生を出生から終焉まで辿り直すのは到底無理との判断のもと、享保十年までで記述を打ち切り、前稿での完結を断念するに至ったので、続稿の執筆は当初から予定され

久保田 啓 一

ていた。また、ほとんど湮滅に近い充長の事績を明らかにする過程を具体的な記述に残したいという希望を抱いたのも、本稿執筆を思い立った理由である。本誌の紙面を借りることとなったが、前稿の入稿は本年五月末で刊行までに半年の時間を要したため、本稿刊行の日付が前稿よりも前になるという不整合が生じている。以上の事情をお汲み取りの上、ご理解頂きたい。

なお、前稿掲載の『和歌史の中世から近世へ』には抜刷がない。定価一万七千円の論文集を各位に進呈する経済的余裕はないので、ご関心をお持ちの方からお申し出を頂ければ、前稿の複写をお送りすることに対応したい。そのような処置を取ることをお許し頂ければ幸いである。

続いて、前稿に立項した充長の事績を章立てとともに年譜形式で掲げ、依拠した資料名を括弧に入れて添えておく。

一 仁木充長とは

二 名乗りと出自

寛文十一年（一六七二）一歳

○ この年に出生か。『霞関集』・『類聚名物考』・無窮会図書館神習文庫蔵『在京随筆』・『寛政重修諸家譜』巻一二〇・『常憲院殿御実紀』巻二十七・内閣文庫蔵『柳菴日次記』二十二・内閣文庫蔵『諸家系譜』第四十七冊「仁木系譜」・『寛政重修諸家譜』巻七

三 冷泉家入門と最初の上京

正徳五年（一七一五）四十五歳

○ 十月五日、冷泉家に入門。（冷泉家時雨亭文庫蔵入門誓状）

享保六年（一七二二）五十一歳

○ 九月三日、江戸を發し、京の冷泉家を目指す。京到着は九月

二十一日。（内閣文庫蔵『視聽草』六集之四「季秋吟行」）

○ 九月二十三日、冷泉家を訪問し、為綱に面会する。この日、『在京随筆』起筆。（『在京随筆』）

享保七年（一七二二）五十二歳

○ 八月二十四日、離京して江戸に帰る。九月十一日付で「都余波」

脱稿。（内閣文庫蔵『視聽草』六集之四「都余波」）

四 「藤沢記」と二回目の上京

享保八年（一七二三）五十三歳

○ 九月十八日、自宅を出発し、藤沢の白旗神社にて勸進和歌の奉

納に立ち会い、鎌倉の冷泉家旧跡を辿って、九月二十五日に帰る。

（東京大学史料編纂所蔵『相模志料』所収「藤沢記」）

享保九年（一七二四）五十四歳

○ 三月六日、為綱の三回忌に追善十首和歌を詠じ、その詠草の奥に為久が歌を書き付ける。（宮城県図書館伊達文庫蔵『冷泉為久集』・宮内庁書陵部蔵『片玉集後集』巻九十八）

享保十年（一七二五）五十五歳

○ 三月、上京。前年十二月十八日の為久の権中納言拜任を祝賀する歌を詠み、為久より返歌を賜る。（『冷泉為久集』）

○ 春、吉野に行き、吉水院で後醍醐天皇の文台を見る。この後、為久より歌を賜るか。（『在京随筆』・『冷泉為久集』・『霞関集』）

右に掲げた事績のうち、享保六〇七年の記述を支える「季秋吟行」・『在京随筆』・「都余波」と享保八年の「藤沢記」については、紀行の出発・帰着、随筆の起筆など、形式的な面からの大枠の把握に留めたため、充長の関心の所在を見届けるに必要な書名・人名・地名などへの言及がほとんどできなかった。日次の記事が持つ生々しさも、充長の人物を見定めるには不可欠の情報となろう。『在京随筆』については、近世和歌研究会編『近世歌学集成（中）』（明治書院、一九九七年一月二〇日）に自ら翻字して収録してもらったので、通説の便宜は保証されているといつてよからうが、他の三編につい

ては本文の提供もなく、少しく詳細な検討を展開する必要があると判断する。

以下、本稿では享保六年の記述を追補する。充長の和歌は漏れなく掲げ、和歌・歌学に関する記載にも可能な限り言及したい。なお、引用に当って適宜句読点・濁点などを補う。

追補

享保六年（一七二一） 五十一歳

○ 九月三日、江戸を発し、京の冷泉家を目指す。京到着は九月二十一日。

「季秋吟行」の本文に従い、以下の方針で追補を行った。三日から二十一日までの旅程の発着を明記する。また、充長の興味を引く事項の検索の便宜のため、取り上げられた地名・人名・書名などの固有名詞を括弧に入れて掲げる。充長の和歌とその前後の記述は、充長の和歌の集成を図り、詠出状況の確認に資するため、できるだけ省略を少なくして本文を引く。追補の事項は、本来の項目と区別するため、●で立項することとする。

● 九月三日、江戸発、戸塚着。（神田、品川、神奈川、金沢、程ヶ

谷、戸塚）

享保六年九月三日、知己の誘はるゝにまかせて、浮萍のたぐひなる身は心かろく旅立侍れど、父母の国なれば、名残なきにしもあらず。

みやこにとおもひ立にもむさしあぶみさすがに今朝は袖ぞ露
けき

とはいかゞ聞ゆるや、つたなきやなどおもひめぐらすにまぎれて、馬上数十程過ぬ。（後略）

● 九月四日、戸塚発、小田原着。（藤沢、高すな、さがみ河、平塚、西行法師、藤川、富士、箱根、三浦、三崎、大島、あたみ、こよろぎの磯、小田原）

四日、雨猶やまず。朝まだきに出たち、藤沢高すなといふ所を通るに、風まぜに雨ふりて海上も曇ぬれど、澳津白波時々しろく見ゆると聞えければ、

言の葉はとてもよばぬ富士のねをかくす雲こそ心有けれ

（中略）

道のかたはら、西行法師鳴立沢の秋の夕ぐれとよめる旧跡にて、鳴のたつ沢もむかしの秋ならぬ秋をぞしたふ跡のゆふぐれ

（中略）

こよろぎの磯にて、

行す急の山路もあすやこゆるぎのいそぐに秋の暮やすきころ

乗燭の比、小田原の駅に着ぬ。

● 九月五日、小田原発、沼津着。(箱根、湯もと、芦の海、箱根権現、ふじ、黄瀬河、桃園、宗祇法師旧跡、沼津)

(前略)

のぼり／＼て芦の海のみかひに箱根権現の宮有。かさなる山のうへにふじの雪かゞやく。桮の雲など絵にかゝまほしく、かへりみがちにて坂をくだりぬ。

やまいくへこゆる箱根はふもとにてひとりまがはぬ雪のふじのね

黄瀬河の橋を渡る。河より北に桃園といふ所、宗祇法師旧跡とぞ。(後略)

● 九月六日、沼津発、府中着。(浮島が原、あしがらの山、ふじのね、ふじ河、岩渚、由井、奥津、有度浜、田子浦、薩埵山、岩城山、こぬみ浜、袖師の浦、三穂、清見がた、江尻、高井氏、真政、狐が崎、草薙、府中)

六日、夜をこめて立いで、浮島が原のあたりを行く／＼みるに、暁雲かゝりて高根はみえず、やう／＼桮ばかり、それかあらぬかとおぼめく程、明はなるゝ空に雪いと白く、あしがらの山の姿もあらはれ侍ければ、

駒とめて裾野にぞみるしのゝめのはの／＼明る雪のふじのね
風に日にみがくや玉の塵いく世つもりてふじの名に高きみね

たぐひなやふもとの雲をすがたにて折／＼ふじのかはるおも
かけ

それよりふじ河を渡侍るとて、

岩渚の山の名におふふじ川の浪も高瀬やこゝろしてさせ

(中略)

海上三穂の遠望いへばさらなり。

暮やすき秋の日はおし清見がたいそ辺つたひのあかぬみるめに

江尻といふ所を行に、駅長一封の消息をとりいでゝ、八月十二日公役にてとをられる時、高井氏あつらへをかれけるよし聞ゆ。ひらきてみれば、

けふはるし富士の高根をたびのみちをくれし友にかくてみせばや 真政(後略)

● 九月七日、府中発、懸川着。(稿科河、木枯の杜、手ごし、さわたり、鞠子、宗長が旧跡の吐月峰、うつしの山、鳶の細道の跡、大井川、かなやの坂、富士の嶽、遠江の灘、さやの中山、菊川、はつくら山、すはの明神、ことのまゝの杜、懸川)

(前略)

むかしの鳶の細道の跡尋聞。鳶楓なつかしく見つゝ行に、楓は稀也。みちのかたはらの岩ねに紅葉たる鳶色を取て、
今もその道こそかはれうつつやまのこるむかしの鳶のみみぢ

ば

こえて今朝ゆめかとぞおもふうつの山たどるうつゝの鳶のはそみち

(中略)

さやの中山ちかき所にていさゝかねぶりけるに、是なむさやの中山ぞと人の聞えければ、

つかれてゆく／＼しばしまどろむも名にむつまじきさよの中山

(中略)

道のかたはらに鳥居見え侍るをとへば、すはの明神と聞ゆ。ことのまゝの社を今はかく申となむ。遥拝して、

行道にぬさこそとらねねぎことのまゝにとたのむ神のみやしる (後略)

●
九月八日、懸川発、白菅着。(みかの坂、みかのはし、伊間の浦、見付、天中河、浜松、ひくまの、いなさ細江、あらゐのわたり、高師山、はしもと、浜名の橋の跡、浜名、汐見坂、遠江灘、白菅のみなど)

八日、例のころいでゝ、みかの坂、みかのはしなど行に、左のかたに池有をとへば、伊間の浦とことふ。

いづれぞとたづぬる伊間の浦なみは池か沢かとみるばかりにて

見付の里を過、天中河をわたり、浜松の里にてしばし休侍り。此あたり、ひくまのといひけるにや。いなさ細江の辺すぐるとて、

浪あれてかはり行世のいまもなをいなさ細江の名にぞのこれる

あらゐのわたり、おりふし風あらくして、舟のうちしほどけし。高師山のふもと、はしもとなど行に、浜名の橋の跡は浪しるく立て、関の北五里ばかり奥に浜名の里といふところ有といふ。

高師山ふもとの橋はたえていま浜名やさとの名にのころらむ汐見坂を過るころ、西に過たり。夕の月浪に移り、汐に曇り、風さえて立どまりがたし。此あたり遠江灘七十五里とかやいへり。

よる浪に移ろふ月もしら菅のみなどさむけき秋のゆふかぜ

(後略)

●
九月九日、白菅発、岡崎着。(宮地山、花園山、挙呂母、八橋、岡崎)

九日、友なふ人、菊一枝見せられければ、

今日の為折えしきくもぬれてはずやま路にあらぬ露のかりぶし

星をかざしていそぎ出道すがらとひ侍れば、宮地山、花園山、挙呂母、八橋など近しいふ。(後略)

● 九月十日、岡崎発、桑名着。(智立、鳴海、伊勢・尾張のあはひの海づら、夜寒の里、松風の里、星崎)

(前略)

鳴海を過る時、雁の鳴ければ、

日数経て行程さむくなるみがたしはなれ衣雁やなくらむ

いぬの時ばかりに舟に乗て、かの伊勢・尾張のあはひの海づらをゆく。月さやかに浪静にて、しばしまどろむ程に舟着ぬ。夜

寒の里、松風の里、星崎など、このあたりに有べし。

● 九月十一日、桑名発、関着。(桑名、亀山、関、鈴鹿の関の跡)

● 九月十二日、関発、草津着。(鈴鹿山、すゝか川、蟹が坂、草津)

十二日、雨しきりなれど、宿をいで、鈴鹿山をこゆるころ明はなれぬ。

河浪の八十瀬ならねどぬれ／＼てこゆる鈴鹿の秋の山みち

岩浪もなる音たかしすゝか川山路こえゆく秋のしぐれに

蟹が坂といふ所にて、

松風も浪かとぞきく蟹がさかあめのあしさへ横さまにふる

(後略)

● 九月十三日、草津発、伏見着、乗船。(野路の里、玉河、瀬田、石山、比叡の山、三井寺、唐崎の松、比良高根、三上山、うち出の浜、相坂、音羽、蟬丸明神、関清水、関小河、走井、伊勢路、吾妻、近江路、尾張国、山科、木幡、筆の坂、藤杜、墨染、音羽

川、墨染寺、伏見、淀、宇治、八幡、山崎)

十三日、宿をいで、野路の里などゆく。田の中に玉河の流としていさ、か残れり。まだ明ぬほどなれば、

入月の影をぞしたふあけやらぬみちのゆくての野路の玉河

明渡るころ、瀬田にて

音にのみ聞しもけさは乗駒のふみならしゆく瀬田の長はし

(中略)

うちでの浜を過、相坂にて、

けふこえてみれば音羽の峰ちかく関路隔つるあふさかのやま

(中略)

さて、山科・木幡など過て坂あり。筆の坂と言と聞えければ、かきとめむ言の葉もがな筆のさかみやこの空のみゆるやま／＼

(中略)

今夜は十三夜なれば、所がら興ありて、

わすれめや後の名におふ淀伏見月にさはさす秋の河ぶね

● 九月十四日、大坂着。住吉等観光。滞留。(難波の津、住吉、高津、生玉、天王寺、亀井、茶臼山、堺多びす島、淡路島山、和田の三崎)

十四日、うしみつ過る比、難波の津に着ぬ。明れば旧知のかた尋侍り。

(中略)

亀井の水手にむすびて、

法の水すめるやよろづ代とかけて絶ぬ亀井のながれなるらむ
茶臼山の桮をめぐりて住吉にまふで、神拝して心中に手向奉け
る。

今日は来て更にぞ祈るすみよしの神のつたへしことの葉のみ
ち

それより堺あびす島にまふで、舟に乗侍り。海上浦輪の佳景い
と珍らし。住吉の浦の松、淡路島山夕日かたぶくなど、えもいはず。

住吉の浦輪こぎゆく夕なぎにみるめぞあかぬ淡路しまやま

（後略）

九月十六日、大坂滞留。高井真政に返書。（高井氏）

十六日、京の便もとめて、彼江尻にて見侍る高井氏消息の返事
つかはす。

人もかくみつ、過しとおもふよりかよふ心やおなじふじのね

九月十九日、大坂滞留。（堀江、生駒嶽）

十九日、堀江のあたり舟にて行けるに、かえりみれば遠山有
生駒嶽ときこへければ、

生駒やまかへりみられて堀江見にこぎゆく舟の跡をしぞおも
ふ

はりえにてあられ少し降ければ、

浪の玉ちるも珍らしほり江見にこぎくる秋の今日のあらはれ
九月二十一日、大坂発、京着。（松がはな、江口の旧跡、三島江、

佐太の天神、天河、交野、渚岡、渚杜、渚院の跡、観音堂、磯島
のはし、葛葉、関の跡、八幡、山崎、水無瀬殿、広瀬村、淀河、
水無瀬河、古曽部、金龍寺、美豆野、淀のはし、桂河、羽束師の
杜、鳥羽、京

（前略）

三島江にて、

芥のみかきそへけりなみしま江の玉江の名にはあらぬことの
葉

（中略）

さて鳥羽にかゝり、秋の山を右になして京のかたにゆくに、晩
景になりぬ。

仁木省二沙弥充長

十四日の大坂到着後の記述は簡略となり、京へ向け出発する
二十一日までの八日間の行動をつぶさに知ることができないのは残
念であるが、今回の上京がどのような目的のもとに成されたかを知
る上で貴重な情報を得られることをもって多としたい。以下、第一
の論点として充長が享保六年から七年にかけて在京した背景につい
て、第二の論点として「季秋吟行」における充長の方法はどのよう
なものであったかについて、それぞれに若干の考察を試みたい。

第一の点については、先に拙著『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林
書房、二〇〇三年二月二八日）や拙稿「歌の家はなぜ続いたか」（浅

田徹・勝原晴希・鈴木健一・花部英雄・渡部泰明編『和歌をひらく 第一巻 和歌の力』(岩波書店、二〇〇五年一〇月二〇日)所収)でいささか触れるところがあった。既に言及した事柄を再掲する場合は必要最小限に留めるが、いささか重複することをお断りしておく。

まず確認しておくべきは、充長は八代将軍徳川吉宗の文化政策の一環として京に派遣されたのであらうということである。「有徳院殿御実紀附録」巻十に、吉宗が「古書を求めたまふの令」を下し、諸家が家蔵の古書を献じたことが記されるが、その後には、

また岩橋七郎某、並河五一郎永崇、羽倉藤之進在満、茶屋宗有某、仁木省二充長、榊原源八某などは、もとより処士の身なれば、常に京奈良の辺を経歴して、石清水、鞍馬、加茂、吉野等の諸寺諸社の旧蔵どもを、たづねいだしてまいらせたり。(『新訂増補国史大系 徳川実紀』第九篇二四一頁)

と、荷田在満らと並んで充長にも古典籍調査の命が下ったことを記す。古典籍を集めることで宮廷・公家・社寺を含む文化全般の統御に意欲を示す吉宗の意向を受けて、自由な境涯を最大限生かして学力を公務に振り向けた存在として、充長は位置付けられていた。

次に、充長が江戸を発した九月三日のわずか十日ほどの享保六年八月二十二日に、冷泉為綱が冷泉家文庫の勅封と所司代・武家伝奏による管理を解く旨の院宣を受け、同二十八日には武家伝奏が冷

泉家に出向いて書庫の封を撤去したという事実がある。これまで冷泉家当主といえども、伝存する古典籍を自由に閲覧することが許されなかったのだから、この決定は冷泉家のあり方を根本的に変えることとなる。俊成・定家以来の歌道の伝統をも幕府の統御のもとに置きたいと吉宗が考えたのは間違いないであらう。京に出向いての实地調査を誰に依頼するかという時、六年も前に冷泉家入門を果たしていた充長が最優先の候補として選ばれたのは、至極当然の判断といつてよい。

そして、九月六日と十六日の記事に見られるように、充長とはすでに十分な人間関係を有していたと思しき高井真政が、享保六年から七年にかけての充長の調査を支援する役目を担っていたのではないかと推測する。真政は享保五年(一七二〇)九月三日より幕府の御蔵奉行を勤めていたが、「六年閏七月六日仮に二条の御蔵奉行となりてかの地にいたり、七年十月十五日帰府」(『寛政重修諸家譜』卷一一九六、『新訂寛政重修諸家譜』第十八・二二八頁)しており、享保六年九月二十一日から同七年八月二十四日に至る充長の滞京を完全に包含する期間、恐らくは出向のような形態で臨時に二条城の御蔵奉行を勤めたことが確認できるからである。

もしこの推測が成り立つなら、京において準備を整えた真政からその旨連絡が入ったことを、九月三日の「季秋吟行」起筆において、「知己の誘はるゝにまかせて」と表現しても不思議はない。冷泉門

の武家歌人である真政なればこそ、「知己」という呼称の持つ意味も一層深まるはずである。なお、六日の条に引かれた真政の歌の初句「けふはるし」は、正しくは「けふはるゝ」であったと思われるが、『視聽草』の本文では末尾を「し」としか読めないので便宜上（ママ）を付しておいた。

以上のように充長の旅を半ば公務によるものと捉えるなら、九月九日の重陽の節句に「菊一枝」を見せてくれた「友なふ人」も、素性こそ分らないものの、「見せられければ」と敬意を表しているところから、充長の任務を補佐する幕府の役人ではないかと想像するのも許されるであろう。また、十四日に住吉社で「今日は来て更にぞ祈るすみよしの神のつたへしことの葉のみち」と詠じるのも、単に個人の歌道上達を住吉の神に祈るというより、これまでを得た歌道の知識や体験をこれから始まる公務に活かそうとの思いを新たにしたいと見るほうがよいのかもしれない。

第二の点としては、充長が意識した先行作や利用した書籍を検討することで、内容と表現の両面から充長の方法を吟味するきっかけとしたい。

まず、東海道を京に向かう紀行として「季秋吟行」を評価する場合、特出した内容を有しているわけではないことは確かである。文芸に関わる名所として、例えば西行・宗祇・宗長などの旧跡に思いを致すのは当然といえようし、箱根や富士の詠は、関東下向を行っ

たことのない京の公卿たちに披露するには何よりの素材として普遍的に享受されてきた。先に掲げた住吉社での和歌も、和歌の聖地での作としては頗る常識的な修辭に終始している。

そのような「季秋吟行」ではあるが、充長の著述の現場を再現するつもりで著者に密着しながら読んでいくと、和歌も考証も伴わない地名の列挙のうちに、充長の参照した書物が浮き上がる事例を見出す。ほんのわずかな例示に留めるが、例えば九月九日の条で「宮地山、花園山、挙呂母、八橋など近しいふ。」と言及される四つの歌枕のうち「宮地山」と「花園山」が、刊本『歌枕名寄』（万治二年（一六五九）識語）巻第十九の「参河国」に連続して立項されること、同じく十日の「夜寒の里、松風の里、星崎など、このあたりに有べし。」の一節に見える「夜寒の里」と「松風の里」も、同巻「尾張国」の末尾に肩を並べて採録されることを考えると、紀行執筆を志した充長の手元に参考書の一つとして刊本『歌枕名寄』が備えられ、同書の記載に従って文章を綴った結果として受け止めるのが最も自然なのではないか。

もっとも、同書のみで行文がすべて可能であるはずもない。九月八日に「見付の里を過、天中河をわたり、浜松の里にてしばし休侍り。」と記される「天中河」は天竜川に該当するが、『歌枕名寄』には採録されず、刊本『藻塩草』巻五「水辺部」の「川」に「天中川」として立項され、「遠州やすのわたりうき木此河はすはの湖の

末也と云々」(大阪佛文学研究会編『藻塩草 本文篇』(和泉書院、一九七九年二月二三日)五六頁)との説明が成されるので、こちらを参考したのかもしれない。ただし、このような辞書の類に依拠せず、東海道紀行の先蹤として最も著名な「海道記」、冷泉家祖の母阿仏尼の「十六夜日記」などを熟読して、敢えて「天竜」ではなく「天中」をもって呼称した可能性もあり、ことは充長の教養の程度に関わる問題ともなつて、軽々に評価を定めるのは適切ではない。いずれ詳細な注釈を施す場を別に設けて論じることとしたい。

○ 九月二十三日、冷泉家を訪問し、為綱に面会する。この日、『在京随筆』起筆。

前稿では、この日、充長を迎えた為綱が「能コソ上タレト仰ラレ」たこと、十二月三日に持明院基時の「筆道之一巻」を拝借したこと、享保七年五月七日の記事が『在京随筆』で月日の明記される最後の項となること、充長が冷泉家で実見した古典籍の記録としての価値を論じた研究として海野圭介氏「仁木充長所校本覚書」(島津忠夫先生古稀記念論集刊行会編『島津忠夫先生古稀記念論集 日本文学史論』(世界思想社、一九九七年九月一八日)所収)があることなどに言及した。海野氏稿では、充長が閲覧や調査を許された典籍に関する記事を日付順に掲げ、冷泉家に現存する本の情報と照合する

検討が行われる。本稿ではそれとの重複を避け、『在京随筆』の享保六年中の日次の記事を冷泉家に限ることなく見渡すための便宜として立項するに留めるが、先行研究や他資料による補足が必要な場合は記述を加えることとする。各項の末尾には『近世歌学集成(中)』の頁数を示す。活字化されているので本文の引用は極力少なくするが、追補の過程でどうしても必要な場合には改めて引用する。追補の事項を●で示すのは先の記述と同様である。

● 九月二十三日、冷泉家に参上、為綱と対面し、薄暮に旅館に帰る。(四二五頁)

冒頭の一節は、前稿の寛文十一年項で名乗りの考証に用いるため部分的に引用したが、為綱の款待ぶりが非常に生き生きと伝わるので、最初の一つ書のみを再掲する。

一 享保六年辛丑九月廿三日、冷泉殿に参、御対面。能コソ上タレト仰ラレ、御歛也。御物語ノ序ニ仰二云、省二、甚五郎ノ時ヨリ心安テヨイハ。サテソナタハ歌二名ハ何トカキヤルゾ。申云、先名乗ヲ用申候。何ト書可申候哉。仰云、省二ハ字也。歌二ハカ、レマイ。ヤハリ名乗ノ充長ヲジウチヤウト唱テ兼好流ノ名ニシテ、懐紙ニモ向後源モヤメテ沙弥充長トカキヤレ。ソナタナドノ類ハ皆沙弥ト書コトシヤ。又仰云、道中吟行アルベシ。富士歌如何、可入御覧旨仰也。去七月於院御所御沙汰有之、

冷泉家文庫開戸、家伝和歌一流書籍熟覧可有之由院宣也。

冷泉家の文庫の勅封が解かれ、「書籍熟覧」がようやく可能となったことと、幕府の指示を受けて直門の充長が遙々上京を果たしたことに、為綱がどれほど心を躍らせたかが明瞭に伝わる書き出しである。以下に「秘檐子中」の伝来の典籍や冷泉家文庫の概況などが次々に記録されてゆく。充長の公務は初日から開始された。

● 九月二十五日、持明院家に参上、基雄の披講を聴聞、「披講野曲御相伝可有之旨」の仰を承る。その後冷泉家に参上、止宿。
(四一六頁)

● 九月二十六日、冷泉家にて雑掌中河右近と問答、狂歌を詠じて為綱の御覧に入れるよう依頼して旅館に帰る。(四一六頁)

この日の記事も前稿の寛文十一年項に引用した。字の省二について補足を加えるための便宜として、やはり再掲する。

廿六日、充長、右近に問云、中納言様、私ノ省二トツキ申候ハ何ト被仰候哉。右近云、サレバ御尊候ハ、定テアノ男、心アリテ省二トツキヌラン。何ト云心ジャノト申サレ候。充長硯ヲカリテ、

になひ来る仁木のはしの二文字省て休め身はくだり坂
此狂歌ヲ被入御覧候へと申て旅館に帰。

「中納言様」即ち為綱が充長の字省二について右近に由来を尋ねたという興味深いやり取りがあったのがこの日である。「省二」は「せ

いじ」と読むかと思われるが、次に掲げる資料では「せいに」と読まれたことが確認できるので、念のため紹介しておく。川崎市市民ミュージアム池上家文書に蔵される池上幸政（のち幸豊。大師河原の名主池上家当主）の書留『宗匠家御詠歌 一』に次の二首が収められる。

為久卿より仁木せいに方へ下されし御歌

古郷にかへりつきなば旅の道ことなかりきとはやもつげこせ

御返し 仁木せいに閑東へ下りて後申奉る

古郷の春にことなくかへり来てしばしみやこの名残をぞ思ふ

師事する成島信遍の紹介を得て幸政が冷泉家に入門したのは延享三年（一七四六）四月十九日であり（拙稿『成島信遍年譜稿（二十一）』、『広島大学文学部論集』八〇巻、二〇二〇年二月二十五日）、元文二年（一七三七）には没することとなる充長との間に直接の交渉はなかったと推測される。その点で「せいに」の読みには全幅の信頼を置き難いのは確かであるが、幸政と信遍との間で情報交換がなされていたと仮定すれば、相応の重みを認める余地は残る。

● 九月二十七日、霊元法皇の林丘寺宮御幸について為綱の物語を聞く。(四二六頁)

これは十一月六日の記事の後に置かれ、末尾に「右廿七日、御物語承之」とある。恐らく当日に書き留めるのを怠ったため、『在京随筆』を十一月まで書き進めた時点で補ったのであろう。『在京随筆』

は特に後半にしたがって記事の前後が乱れだすのが特徴であり、採録した月日を特定できない条が増えてゆく。その一例と受け止めておく。

● 十月一日、冷泉家に参上し滞留。この間「僻案抄」を拝借して校合に従事する。(四一六頁)

充長が「僻案抄」の校合に熱心に取り組んだ成果は、いくつかの伝本の存在によって明らかとなる。川平ひとし氏『「僻案抄」書誌稿(一)』(『跡見学園女子大学紀要』第一六号、一九八三年三月一五日)では、内閣文庫蔵の二本を組上に載せて充長の校合の意義が述べられる。奥書に記された年時に続稿の筆が及んだ際に改めて取り上げることとし、ここでは川平氏稿の提示に留める。

● 十月二日、持明院家を訪問するも「御所労故」対面できず、冷泉家に参上する。(四一六頁)

● 十月三日、為綱と対面、「此度吟行一卷」を御覧に入れ、褒められる。また、「省二ノ心狂歌」についても「面白」と喜ばれる。懐紙の書法等につき指導を受け、「八雲御抄」「桃花薬葉」などを拝借して校合に従事する。(四一六頁)

● 十月四日、昼帰る。定家の自筆辞世、昨年七月の為綱詠「星夕」七首の懐紙を頂戴する。(四一八頁)

「四日、昼帰。」は、前日条末尾に「桃華薬葉御本拝借、是は旅館に於て連々書写之。」とあるので、冷泉家に泊らず旅館に帰り、四

日にあらためて参上して、夕方まで過ごすことなく早めに旅館に帰ったとの意味かと推測する。

● 十月六日、持明院家に参上、基雄より懐紙の書法及び神楽の披講の指導を受ける。薄暮に辞去、冷泉家に参上し、高雄・嵐山・嵯峨にて詠じた和歌を為綱に見せる。冷泉家に滞留。(四一九頁)

● 十月八日、晩景、旅館に帰る。(四二〇頁)

● 十月十二日、持明院家に参上、入木披講の相伝を受ける。晩景、冷泉家に参上、滞留。(四二〇頁)

● 十月十三日、冷泉為村、玉津島御法楽月次会の人数に召し加えられる。晩景、為村に召されて比叡山の初雪をとみに見、求められて和歌を詠じて呈上する。為綱・為久とも対面、晩景に帰る。(四二〇頁)

書き留められた充長の和歌を引いておく。最初の二首は為村の参加する御会の題に合わせて試みに詠じたもの、次の「神無月」歌は為村の要請で詠じた初雪の歌、そして残りの四首は六日に為綱に差し出した和歌と見られる。『在京隨筆』は日次の詠草も兼ねていた。

時雨 兼題 沙弥充長

晴るとも降とも見えず山はのしぐれの雲に移る日の影

深更萩 当座

萩の葉の音ぞ友なふ見し夢は覚ても長き夜の枕に

比叡山に雪の見えければ 充長

神無月しぐるゝ空を今日見れば都の富士にふれる初雪

高雄

山姫の錦とぞみる秋に名のいとゝ高雄の峰の紅葉々

嵯峨

住ばやなさが野のおくの花の春紅葉の秋の折ならず共

嵐山

神無月みれば嵐の名にもず秋を残せる山の紅葉々

大井河

詠こそこのもかのもとに大井河高瀬のさほのさして行道

● 十月十九日、冷泉家に参上、為綱より歌道に対する精進を褒められ、為久にも指導を仰ぐようにと励まされる。冷泉家に滞留。

(四二二頁)

充長が如何に冷泉家三代の心をつかんでいたかを物語る為綱の言は次のようであった。

仰云、ソナタハ上京懇意格別ナレバ、父子ノ間無隔心三位為久卿ニモ同意ニ和歌事相談シヤ。

● 十月二十日、為久と和歌について談じ、詠草を呈上する。享保四年（一七一九）に為久が江戸下向の折に富士を詠じた和歌について聞き書きする。為村、月次御会に参加。（四二二頁）

充長の和歌が兼題と当座の二首記録されるのは、十三日と同様、為村の参加した月次御会の題で自らも詠じてみたものなのだろう。

寒草 兼

充長

霜さやぐ夕風寒し道のへの草の枯生にまじるをさゝも

雪中獸 当

此頃はさぞなかるもの床さむみ雪にふすあやかきこもる覽

次の二十一日に「旅館に帰。」とあるので、二十日は冷泉家に滞留したと思われる。

● 十月二十一日、旅館に帰る。（四二二頁）

● 十月二十五日、持明院家に参上、その後冷泉家に参上して止宿。

(四二四頁)

● 十月二十六日、為綱・為久と対面、和歌に関する対談あり。晩景より冷泉家二夜三日神事。旅館に帰る。（四二四頁）

● 十月二十八日、為綱、冷泉家家伝の書籍熟覽と宗匠勅免を受ける。（四二五頁）

当日の記事は、ようやく宮廷歌壇に然るべき地位を許されるに至った冷泉家の高揚を伝える。既に拙著『近世冷泉派歌壇の研究』五四頁に引いて検討を加えているが、近世の冷泉家の歴史が大きく好転した記念すべき日の記録として再度掲げる次第である。

廿八日、文庫家伝三神神拝、畢テ秘櫓子院御所持参之。前中納言殿・右兵衛督殿同参入、家伝書物覧、畢テ秘櫓子持参退出。其日二荷三種献上之。依家伝之書籍熟覽宗匠勅免嘉儀也。

● 十一月一日、冷泉家依開秘櫓子内会開催。「寄神祝言」題で和

歌を詠む。(四二五頁)

為村と充長の作のみを掲げておく。

寄神祝言

侍従為村

行末に猶ぞ榮む住吉の神の守れる數島の道

沙弥充長

玉津島恵ぞあふぐ家の風有しにかへる和歌の浦浪

● 十一月三日、冷泉家に参上、先月二十八日の嘉儀を申し入れる。

為村の和歌を頂き、滞留。(四二六頁)

この日、充長の祝いの言上を受けて為村が詠じた和歌に、充長は改めて感嘆の念を強くした。

祖父公家伝の御箱を開かれし時 侍従為村

君が代に直なる道ぞ榮ゆく此言の葉の伝たがはで

右一枚紙に書付給て賜充長。侍従殿十歳也。

最後の「侍従殿十歳也。」に、十歳にして冷泉家歌学の伝統を体现する覚悟を固めた為村への尊崇の念を読み取るのは容易であろう。

● 十一月四日、夕刻、為綱と対面。(四二六頁)

● 十一月五日、夕刻、為久と対面。そのまま滞留か。(四二六頁)

● 十一月六日、旅館に帰る。(四二六頁)

● 十一月八日、冷泉家に参上、その後山科家に参上して山科堯言と対面、「衣文御手もと」を拝見する。対談の後冷泉家に参上し、止宿。(四三〇頁)

山科家に参上したのはこの日が最初であつたらしいが、この前から有職故実の記事が増大する。情報を得た日時を明記しないまま記述を進めた結果か。

● 十一月九日、山科家に参上、山科持言と対面。終了後旅館に帰る。(四三〇頁)

● 十一月十三日、冷泉家に参上、為村、玉津島御法楽月次会に参加する。柳原光綱とも面談。(四三〇頁)

まず、為村と同題で詠じた充長の和歌二首を挙げる。

氷始結 兼

充長

終夜さえし嵐の跡も今朝見えて氷れる庭のやり水

聞擣衣 当

巻かへす程やたゆみしきけば又夜半の碓の打頻音

これにも増して興味を惹かれるのが、為綱の末子で柳原家を継いだ光綱との出会いである。

今日柳原侍従殿光綱朝臣御出、懸御目。前中納言殿御末子也。

柳原家相續十一歳也。

光綱は為村とほぼ同世代。彼らが宮廷文化の中心に座る将来を樂しみに待つような感慨が末尾の一節に籠る。

● 十一月十四日、夜分、衣文稽古あり。(四三〇頁)
場所は示されないが、山科家に参上してのことと解釈して差し支えあるまい。

● 十一月十五日、白昼、旅館に帰る。(四三〇頁)

前日の夜に行われた「衣文稽古」の後、山科家に滞留した結果と判断する。

● 十一月十九日、冷泉家に参上、夜に聖廟にて「東坊城秀才文章得業生正六位上菅原長誠十五歳献策」問答を拝聴し、冷泉家に滞留。(四三〇頁)

● 十一月二十日、為村、月次会参加。同題で和歌を詠む。冷泉家に滞留するか。(四三二頁)

田家雪 兼

充長

降積る雪もいとはじ民の戸のこむ年有と思ふ田実

樹陰夏月 当

もりくるや涼しさまねく玉柏木の間曇らぬ月のさよ風

● 十一月二十一日、旅館に帰る。(四三二頁)

● 十一月二十八日、玉津島社法楽和歌行われる。後日、冷泉家の短冊を写す。(四三三頁)

充長がいつ写したかは正確には判明しない。十二月六日の出来事を記した後に中院通躬以下の出詠和歌をまとめて記載するのは、十一月二十八日時点での採録を怠ったためであろう。

● 十二月三日、冷泉家に参上、その後持明院家に参上、故大納言基時の写し置いた「筆道之一巻」を拝借する。神楽の次第の書付も写す。晩景、冷泉家に参上し、滞留。(四三二頁)

● 十二月四日、冷泉家にて為綱と面談。(四三三頁)

● 十二月五日、持明院家に参上、行水を浴びて基雄と対面、その後内侍所御神楽を見物し、持明院家に止宿。(四三三頁)

● 十二月六日、朝、冷泉家、昼、山科家に参上、持言と対面。その後冷泉家に戻り、為久と葉室頼胤のやり取りを次の間で拝聴する。為久の詠草を頂戴して旅館に帰る。(四三三頁)

葉室頼胤は「為講師御伝授御来臨」、即ち御会の講師の作法を習うために来訪したのであった。

● 十二月十三日、冷泉家に参上、滞留。為村、月次会に参加。(四三六頁)

例によって同題で詠歌を試みる。

神楽 兼

充長

立まふも神代しられて御火白き雲ゐの庭にうたふ榊葉

冬鐘 当

埋びも残らぬ閨の手枕に猶声さゆる暁のかね

● 十二月十四日、持明院家に参上、その後山科家に参上。有職故実の相伝を受ける。辞去して冷泉家に参上し、滞留。(四三七頁)

● 十二月十五日、禁裏に参入、東山院の十三回忌を前に行われた御懺法講を見学する。冷泉家に滞留するか。(四三七頁)

● 十二月十六日、冷泉家より旅館に帰る。(四三七頁)

● 十二月十九日、節分。夜に五寸ほどの積雪。(四三七頁)

● 十二月二十日、立春。冷泉家に参上、滞留。為村、月次会に参加。(四三七頁)

歳暮 兼

充長

花を待都ならずは行年を旅のやどりにさぞしたはまし

松間月 当

さしのぼる影とみるにも山松の梢はなれぬ月ぞ待る、

● 十二月二十一日、持明院家、山科家、冷泉家に参上、冷泉家に滞留。(四三七頁)

● 十二月二十二日、夜、為綱と和歌について対談。勸盃の事あり。

冷泉家に滞留するか。(四三八頁)

● 十二月二十三日、白昼、旅館に帰る。(四三八頁)

● 十二月下旬、為久に申し出て、冷泉家蔵「宝永二年御着到」「享保五年九月御着到」を謄写する。(川崎市市民ミュージアム池上家文書蔵『宗匠家御詠歌 一』)

追補のついでに、前稿で触れることのなかった事実を加えておく。

九月二十六日の項で利用した『宗匠家御詠歌 一』巻頭に、「宝永二年御着到」と「享保五年九月御着到」の抄出が収められ、それぞれの末尾に「右兵衛督殿為久卿御筆御本申出之謄写之畢 享保六臘月下旬 充長」(宝永二年)「右兵衛督殿為久卿御本申出之謄写之畢 享保六臘月下旬 充長」(享保五年)との奥書がある。『在京随筆』にも御会記録を抜書した跡は認められるが、この二つの着到百首は

書き留められていない。池上幸政が充長の奥書を有する写本を見したのかどうかは不明であるが、充長のもたらした情報が関東冷泉門の間で共有されていく過程を実証する資料として、この奥書を掲げる意味はあろう。

● 十二月晦日、旅館にて年を越す。(四三九頁)

この日の記事は「晦日、快晴。於旅館迎年。夜静。」とあるのみ。簡潔な表現ながら、充実した京滞在に満足しつつ静かな除夜を迎える充長の様子を十全に伝えている。

(以下、続稿)

付記 本稿は、二〇二〇(令和二)年度科学研究費補助金基盤研究(C)「成島信遍研究―幕臣文人の事績を通して見る近世中期江戸文壇の特徴―」による研究成果の一部である。

—くぼた・けいいち、広島大学大学院人間社会科学部研究科教授—